
エンジェる RINKO

まりちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジえる RINKO

【Nコード】

N5196A

【作者名】

まりちゃん

【あらすじ】

鈴子りんこは中学2年生。ある日学校の作文で優勝してしまった為、ロシアに行くことに。ロシアで宿泊中に部屋に悪魔に取り付かれた少女が窓をわって侵入。そこで鈴子の力が現れる。その力は悪魔を弱らせる力。悪魔はほおって置けば世界が滅亡するまでの力になるのをほおっておけず今日も鈴子は悪魔退治をする……。

聖話 作文で

「平和作文 優勝たなへ 田辺鈴子りんこ！！」
校長先生が鈴子を呼び出した。鈴子はええ！っという顔で驚いている。

ステージに上がり校長先生から賞状をもらう。

「おめでとう。」

校長先生が笑う。

「ありがとうございます！！」

鈴子がマンベンの笑みを浮かべる。

「では全校生徒の代わりにロシアにいつてきてね。」

「はい！」

ステージの階段をタンタンと降り、列に戻る。

周りの奴らは『まさかあいつが？』と愚痴をこぼすが、鈴子には何も聞こえなかった。

キュウイー……ん！！

飛行機が空を飛んでいる。下には雲があり、雲の下には町や山・海が見えた。

「ここからおちたらどうなるかな……？」

つと眺めをみながら思う。

「ハツハツハツ！鈴子！お前のおかげで家族旅行だぞ！！」

「お父さん！周りの人に……」

家族の中で一番はしゃいでいるのは鈴子の父だった。

それをとめられるのは母がぶちきれた時だ。

ほんつとーにうるさいつと心のそこから思う。

だんだん飛行機になれてきて、眠くなってきた。

ロシアまではあと何時間もあるので、鈴子は眠った。

起きた時には飛行機が着陸したときだった。

震動がすごくして鈴子のようにゆれ起こされる人が多かった。

「おきて！着いたよ！！」

「ん……。ロシア？速いわね……。」

目をこすり、すぐに父親を起こす。すぐに父はおき、

「オオオオ！！ここがロシアか！！」

やはりここでも一番ウキウキしていた。

飛行機から降り、空港内のロビーで『サンタマリアホテル行き』とカタコタな日本語で書かれた看板をぶら下げたロシア人があたりを見回している。

どうやら鈴子たちを案内する人らしい。

「すみませーん。」

父親が呼びかけ、ロシア人がすぐグツリ！！と向いてきた。

ビックとしたが、すぐ笑みを浮かべ、

「予約した田辺です。」といった。

「ハ・ジメマシテ。わつつたしノなまえハ、ジョン・レナル
でイス・、」

なんともいえなくカタコタだ……。ジョンがすぐ自己紹介をした
後、鈴子達をバスに乗せて

ホテルに向かった。

聖2話 少女

ホテルについた。親はロシアだ！ロシアだ！！と騒ぎに騒いで鈴子をのこして探検にいった。

鈴子はすぐベットに向かったけど、飛行機で寝たせいかなかなかねつけない。

そこで冷蔵庫にある牛乳を沸騰させてホットミルクを作っている。その間テレビを見ようとしたが、英語でなにをいつているのか分からない。

テレビを消し、ミルクの様子をうかがおうとした・・・その時！！パリーん！！がシャン！

なんと窓を割って少女がはいってきた。

そのことに驚き、鈴子は尻もじを着いた。

少女は髪の毛がぐしゃぐしゃでキャーミーソールをきている。

鈴子をじっとみつめていきなり襲いかかった！！

鈴子はびくくつとして右手を前に目をギュウツとつぶる。

万事休すか！？とおもったが目を開いてみると少女が頭を抱え、ギヤアギヤアつと悲鳴をあげている。なにがおこったの？？とおもっているとドアを開け神父と助手と十字架を持って、祈っている。すると少女は気を失った。

神父は鈴子に近づいてきて英語で話しかけてくる。

鈴子はどうやら『大丈夫？』つとっているな・・・つとおもいうなずく。

すると神父は驚き助手たちと話し合い、いきなり鈴子を抱きかかえる。

「ギヤアーギヤアー！！放せ放せ！！」

つと抵抗するが、反対に相手はそんなにうれしいのかと喜びさつさと車に乗せた。

車がとまったところは教会だった。

呆然と立ち尽くし、教会の中へと案内された。

助手は何かの準備をし、神父は鈴子にイガイガの冠をかぶせた。

そのあと聖堂のなかの器を持ってきて、鈴子に渡す。

そして何人かの人たちに囲まれ呪文をかけられた。

鈴子は何をしたらいいか分からず、座るがいきなり神父が器をとり、

鈴子の口がババババ！！

っと入れた。器の中には・・・血がはいつていた。

聖3話 放たれた力で

ゲホゲホ……。鈴子は思わず血を吐き出し、口をおさえ動転する。何すんのよッ！！と怒鳴り散らしたかったが、声がうまく出せない。

それに神父たちは十字架を片手にまだ呪文を促している。

急に神父たちは鈴子のまわりから離れ一列になり拝めはじめた……。なに……。？どうしたのよ？？とおもいきよとんとしているが、自分の体の異変にだんだんと鈴子自信も気がつき始めてきた。

いつもより体が軽いと思うし、ひじにつく羽に触ったような感触。まさか！？？とおもい窓のまえにたったら、自分の背中にツバサがはえている。

イガイガの冠をとりじつと見つめ……。『うそだ！！夢だ！！こんな現実じゃない！！』

はやく目を覚ますんだ！！』と自分に言い聞かせるが……。どんなに思っても変わらなかった。しだいに体が震え始めた。

そんな鈴子に神父は近づいてきて自分の右手に縛ってある十字架をはずし、

鈴子の手にぎゆう！！と巻きつけた。

するとふう……。つとツバサがきえた。

「え……。ツバサが消えた……。あたし……。どうなっちゃたの？」ふと背中をさするがいつももの背中だった。

神父はにっこり笑い、神父の後ろに3人に押さえられた少年を指差した。

少年は騒ぎ、なにやら、うなり狂っている。

鈴子自信も自分がどうなってしまったのが良く分からないが……。とにかく少年を助けなければならぬ……。つと心の奥から思い、

自然に右手を少年の前に出し目をつぶり、助けてあげて。つとおもった……。

すると右手に光が放たれ、少年が急に静かになり気を失った。
周りはおお！！と驚き、もう一度拜める。
鈴子は右手を出し・・・自分の力がなんなのか分かった。

聖4話 力で

「悪魔を弱らせる力」「悪魔を封印する力」

鈴子に2つの力が宿った。

どうして私にこんな力をもつようになったんだろう？つと

思うが、誰に聞けばいいのかわからない。

すると国の関係で教会に日本語通訳者がきた。

鈴子の前でひざまずき、

「はじめまして。聖女。私の名前はジョーカー・レナルです。」

「あ……どうも。」

かるくお辞儀する。でも「聖女」と呼ばれてすごいびっくり。

その間、ジョーカーは神父と話をしている。

「では、聖女。あなたのことについてお話いたしましょう。今日悪魔に取り付かれた少女に襲われかけましたよね？その時力が目覚めたのです。まさしくそれは聖女の力。」

「あ……でもなぜ私がえられたんでしょうか……？」

「神父にもそれがわからないといっていますが、通常悪魔と対面しただけでは力は発揮できません。なので聖女法式を執り行いあなたを聖女になされました。」

「じゃあ！あのツバサは？」

はつとし、ジョーカーを見つめる。

「ツバサは天使の証。ツバサの色が純粹であるにつれて力が強いのです。ツバサは血によって生えさせました。普段ツバサを出しているとやばいので、十字架のナカで封印しています。だから絶対十字架をはずさないで下さい。あと一日10分間光を浴びてください。そうすると聖力がアップします。」

「はい……でも悪魔はソウソウいないはずでは？だからほおって置いても……。」

「ほおって置いたら世界は滅亡です……！」

ジョーカーはすぐ強い口調で答えた。

「・・・。詳しい話は明日で・・・。今日はおやすみを。」

「あの、ホテルに・・・。」

「ホテルへは私が送ります。」

鈴子を誘導しホテルに向かった。

部屋に着いた時には少女が破って入って来たガラスは修正されていた。

とにかくねむかったのですぐ眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5196a/>

エンジえる RINKO

2010年10月9日10時08分発行